適性検査Ⅰ

注　意

1　問題は **1** のみで、**8ページ**にわたって印刷してあります。
2　検査時間は**四十五分**で、終わりは**午前九時四十五分**です。
3　声を出して読んではいけません。
4　答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
5　答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
6　**受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立三鷹中等教育学校

問題は次のページからです。

1　次の〔文章1〕と〔文章2〕を読み、あとの問題に答えなさい。（※印の付いている言葉には本文のあとに〔注〕があります。）

〔文章1〕

小学三年生の涼花は、同じ水泳教室に通う友達のミチルが水泳大会に出場するのに応援には行かないで家にいることにしたが、もやもやとした気持ちでいた。そんな気分を晴らしたくて、祖母のシズエが友人の正子さんと会うというのでついて行くことにした。喫茶店で涼花は、正子さんと話している。

涼花がぼんやり考えていたら、遠慮がちに顔をのぞきこまれた。

「大丈夫？　もしかして、今日はなにか他に用事があったんじゃない？」

涼花はぎくりとした。

「ないです」

もしや、時計を気にしているのを見られていたのだろうか。たいくつしていると誤解されたのも、そのせいかもしれない。

「実はね、前にシズエさんと会ったとき、いっぺん涼花ちゃんに会ってみたいなってわたしが言っちゃったのよ。それで無理に連れてこられたんだったら、申し訳なかったなと思って」

「違います」

どちらかといえば、無理に連れてきてもらったのだ。涼花が懸命に首を横に振ると、正子さんの表情がほぐれた。

「それなら、いいんだけど」

納得してくれたようだ。これ以上詳しく説明しなくてもよさそうだったけれど、なぜか涼花は言葉を継いでしまった。

「友達が」

正子さんが笑みをひっこめた。涼花の目をまっすぐに見て、うなずく。

「水泳の、選手で」

クロールで水をかくみたいに、涼花はひとことずつ続けた。

「今日も、大会に出てて。だけど、わたし、応援に……」

なんて言いたかったのか、そこで急にわからなくなってしまった。応援に行かなくて？　行けなくて？

涼花の話に、正子さんは黙って耳を傾けてくれた。

「さみしいね、それは」

しんみりと言われて、涼花はびっくりした。なんでわかるんだ

ろう。さみしいなんて、ひとことも言わなかったのに。
涼花の気持ちを言い表すのに、それほどしっくりくる言葉はない。けれど同時に、口にすべきではない言葉でもあった。ミチル本人に対しては言うまでもなく、家族や友達と話すときにも、そう口走ってしまわないように涼花は心がけていた。
すごい。がんばれ。おめでとう。才能を認められ、日々努力を重ねているミチルにふさわしいのは、そういった前向きなひとことだ。さみしいなんて、言っちゃいけない。前へ前へ、ぐんぐん泳いでいこうとしている友達の足をひっぱるようなまねはしたくない。
でも。
「さみしい、です」
口に出したら、体から少し力が抜けた。
「そんなこと言っちゃだめだけど。ていうか、思うのもだめだって、わかってるんだけど」
言い訳すると、正子さんが※眉間にしわを寄せた。
「思うのも、だめ？」
「だめ、じゃないですか？」
涼花はこわごわ問い返す。

「だって、さみしいものはさみしいでしょう。涼花ちゃんがどう感じるかは、涼花ちゃんの自由よ。お友達に言うかどうかは別としてね」
正子さんがテーブル越しにずいと身を乗り出した。口もとに手を添えて、ささやく。
「わたしもね、さみしかった。シズエさんがいなくなっちゃって」
内緒話をするみたいな、小声だった。
「どうして辞めることになったか、涼花ちゃんも聞いてる？」
「中途半端になるから、って」
来る途中に聞いたままを、涼花は答えた。
「まじめだから、シズエさんは」
仕事を辞めたいとおばあちゃんから相談され、正子さんは反対したという。
「もったいないと思ってね。シズエさんは教師に向いてた。子どもたちにも※慕われてた。あきらめられなくて、説得しようとしちゃったのよね。あなたならできる、って」
それこそさみしそうに目をふせて、ぽつぽつと言葉を継ぐ。
「だけど今考えたら、かえって追い詰めてたのかも。本人が考え抜いて決めたことなんだから、応援してあげるべきだったのに」

「でもおばあちゃんは、ひきとめてもらえてうれしかった、って」
涼花は※おずおずと言ってみた。
「シズエさんは優しいわね。相変わらず」
正子さんがつぶやき、顔を上げた。
「まあ、おかげさまで、今もこうやっておつきあいが続いてる」
「五十年もずっと友達って、すごい」
涼花が※嘆息すると、正子さんはふっと笑った。
「五十年間ずっと、こんなふうに会えてたわけじゃないけどね。お互い違う道に進んで、※ご無沙汰してた時期もあった」
でも不思議ね、と涼花に微笑みかける。
「はじめてこの店を見つけて、ふたりでパフェを食べたとき、わたしもシズエさんも独身だった。もちろん子どももいなかった。なのに今、わたしはここで、涼花ちゃんとこんな話をしてる」
じっと見つめられ、涼花は※こそばゆくなって目をそらした。
ぼーん、とまた時計が鳴った。
「ああ、そうだ」
正子さんがごそごそとバッグを探って、小ぶりの紙袋を取り出した。
「これ、よかったらどうぞ」

小瓶をふたつ出して、テーブルの上に並べる。どちらも首にリボンが結んである。片方が水色で、もう片方はピンクだ。
中身は、こんぺいとうだった。黄緑、ピンク、オレンジ色、淡いパステルカラーの小さな星が、ぎっしりと詰まっている。
「あなたと、そのお友達に」
正子さんがにっこりして言い足した。
たぶん、おばあちゃんと涼花にひとつずつくれるつもりだったのだろう。もらっていいものかと涼花が迷っていると、正子さんは瓶をこっちに押しやった。
「遠慮しないで。シズエさんには、次会うときにまた買ってくるから」
涼花は思いきって手を伸ばした。
「ありがとうございます」
来週のレッスンのときに、ミチルに渡そう。ついでに、次の試合はいつあるのか聞いてみよう。
左右の手に持った小瓶の中で、色とりどりの星がきらきらと揺れた。

（瀧羽麻子「さよなら校長先生」による）

〔注〕

※眉間（みけん）――眉（まゆ）と眉の間。

※慕（した）われてた――好かれていた。

※おずおずと――こわがってためらう様子。

※嘆息（たんそく）する――ため息をつく。

※ご無沙汰（ぶさた）――長い間、連絡（れんらく）がないこと。

※こそばゆくなって――照れくさくなって。

〔文章2〕

村上真芽は他の仕事を続けながら、祖母のハルの家の庭を借りて、念願のカフェを開いた。そのカフェは、お茶を提供するだけでなく庭を楽しみながら交流することができるカフェであった。

去年の夏、ハルが老健から家に帰らないと知らされたとき、真芽は、今の自分になにができるのか、近所にあるこんこんと清水の湧く池の畔のベンチで考えた。そして、一度はあきらめたカフェを、憧れの地、鎌倉ではなく、一字ちがいの故郷、ここ佐倉で、ハルが帰れなくなってしまった家と庭ではじめることにした。

ハルばあを、もう一度庭に立たせてあげたい、と思って。

カフェは、ハルの家が人手に渡るまでの期間だけ、と半ばあきらめていた。

ハルをカフェに招待した日、ハルに言われた言葉を、また思い出した。

「これからは、あなたは、あなたの人生を生きてちょうだい」

――果たして自分は今、自分の人生をじゅうぶんに生きているだろうか？

真芽は自身に問いかけてみた。

ハルの家を買ったジローさんの申し出により、思いがけずカフェをそのまま続けられることになった。遠藤君も協力を申し出てくれた。それは思いもよらない幸運な展開だったはずだ。けれどそんな境遇にどこか甘んじて、なんとなく毎日を過ごしてはいないだろうか？

庭の再生は進んでいる。

日曜日だけでなく、土曜日と水曜日にも店を開けるようになった。季節が順番通り庭に訪れ、花々を咲かせる。

けれど、なにかが満たされない気がする。

縁側の陽だまりでまるくなって眠るモンブランを見つめた。

――このままでいいのだろうか？

虚しさが寒気のように襟元から忍びこみ、背筋にまとわりつく。

真芽の瞳から自然と涙がこぼれ、静かに頬を伝った。

どうしてこんなに悲しいのか、自分でもわからなかった。

それは季節のせいだろうか。

それとも独りのせいなのか。

私は、自由なはずなのに。

――なぜだろう。

にじんだ風景の向こうに、見知らぬ人々を乗せた電車が通り過ぎていく。

しばらくして涙を拭った真芽は、なにげなく※スマホを手にした。画面には、※ＳＮＳの投稿が映し出された。以前、鎌倉にカフェ開業を夢見た頃に知り合った、おすすめのカフェを紹介する人気※ブロガー、※ハンドルネーム「カフェ子」の投稿だ。

真芽は一度だけカフェ子に会ったことがある。名前から若い女性を想像していたが、かなり年上だった。その際、真芽は鎌倉での出店計画を熱く語ってみせたのだが、鎌倉で生き残るのはそう簡単ではない、と※釘を刺された苦い思い出がある。

カフェ子の投稿は、あるカフェの人気メニュー「※バスク風チーズケーキ」をとり上げていた。

真芽がつくったことのないスイーツだ。

投稿の終わりに、それをつくっている人物が紹介されていた。

「――さおちゃん」

真芽は思わず声に出した。

カフェ開業を一時は一緒に夢見た元親友・吉村さおりだった。記憶にある笑顔ではなく、やや緊張した表情をしているが、まちがいない。

そういえば、さおりはチーズケーキを焼くのが上手だった。彼女は彼女で、がんばっているのだ。裏切られた怒りよりも懐かしさがこみ上げ、口元がゆるんだ。

吉村さおりは、その店で※パティシエとして働いているらしかった。

そのとき、真芽は気づいた。

場所はちがえども、自分は夢だったカフェ開業を実現した。

そして、ハルをもう一度庭に立たせることができた。

自分には、新たな夢、目標こそが必要なのだ。

真芽は顔を上げ、もう一度、カフェの庭を眺めた。

冬の庭といえども咲いている花はある。

枯れずに緑のままの葉も残っている。

――そうだ。この場所にもっと人が集うよう、そのための新たなメニューを考えよう。

今の自分にできるのは、そのことだ。

（はらだみずき「されどめぐる季節のなかで」による）

〔注〕

※老健――「介護老人保健施設」の略。入所者のリハビリを通じて自立を支援する施設のこと。

※清水――地中からわく、すんだきれいな水。

※池の畔――池のそば。

※鎌倉――神奈川県の地名。

※佐倉――千葉県の地名。

※ジローさん――ハルの隣人。真芽のカフェに協力的な人。

※遠藤君――真芽の友人。

※境遇――その人のおかれた立場。

※甘んじて――十分ではないが満足すること。

※縁側――部屋の外側に作った細長い板じき。

※モンブラン――真芽の庭によく来るネコのこと。

※虚しさ――心の中がからっぽになったような気持ち。

※スマホ――スマートフォンの略。

※SNS――ソーシャル・ネットワーキング・サービスの略。

※ブロガー――自分でウェブサイトに情報を発信する人。

※ハンドルネーム――インターネット上で本名の代わりに用いる呼び名。

※釘を刺され――まちがいがないように念を押されること。

※バスク風――スペインのバスク地方の料理の要素を取り入れたもの。

※パティシエ――洋菓子を作る職人。

〈問題1〉〈文章1〉に「来週のレッスンのときに、ミチルに渡そう。」とありますが、涼花はどのような気づきがあったから、ミチルにこんぺいとうを渡そうと思えたのだと考えられますか。解答らんに合うように二十字以上三十字以内で説明しなさい。

〈問題2〉〈文章2〉に「冬の庭といえども咲いている花はある。枯れずに緑のままの葉も残っている。」とありますが、「冬の庭」が真芽の気持ちを映していると考えると、「冬の庭」とはどのような気持ちですか。また「花」や「葉」は何をたとえていますか。それぞれ二十字以上三十字以内で考えて書きなさい。

〈問題3〉あなたは今、発表会に向けてクラスで演劇に取り組んでいるとします。これまでの準備は順調に進行してきましたが、あなた自身は「このままでいいのだろうか？」（〈文章2〉）と思っています。この後あなたは、どのようにしてこの状況を乗り越えますか。〈文章1〉と〈文章2〉の両方をふまえて、具体的な場面を使いながら、三百六十字以上四百字以内で分かりやすく説明しなさい。

〈きまり〉

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○〈問題1〉〈問題2〉では、段落を設けず、一ますめから書きなさい。

○〈問題3〉では、段落を設け、一ますめを空けなさい。

○、や。や」や空白などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。

○。と」が続く場合には、同じますめに書きます。この場合、。」で一字と数えます。